

アフリカ・広島・阿部知二

——ヒューマニズムと原爆文学

波 瀉 剛

一 はじめに

一九五五年八月、原民喜「夏の花」、大田洋子「運命の街・広島」、阿川弘之「八月六日」、峠三吉らの詩歌、記録集『原爆に生きて』、荒正人、小田切秀雄、花田清輝らの評論を収録した単行本『原子力と文学』が刊行された際、その序文を執筆したのは阿部知二という人物である。

阿部知二は、英米文学の翻訳家・批評家であり、戦前には新興芸術派の一人、あるいは行動主義派の文学者として知られ、日中戦争期には『冬の宿』をはじめとする流行作家の一人でもあった。また、南方における徴用体験や、戦争末期の上海における教員生活を経て、戦後は松川事件や、教科書裁判、アジア・アフリカ会議に参加するなど、「進歩的知識人」としても積極的に活動していたことが知られている。

「広島に世界ではじめての原爆が落ちてから、十年が経った。

われわれは、その恐ろしい事実を想起しながら、またこの十年後の現在にも『原子病』によつて生命を失つてゆきつつある人があるという事実を考えながら、この炎熱の日にあつて、膚がさむざむとするのをおぼえる。」と始まる阿部の序文は、『原子力と文学』が刊行された一九五五年において、いまだに原爆の問題が解決されていない状況を憂いている。とはいえ、収録されたのが評論や詩などの文学作品ではなく、あくまで序文の執筆者という位置のせい、原子力、あるいは原爆と文学の関係について、阿部知二を切り口に展開する論はこれまで見られない。しかしながら、阿部知二と原爆との関係は偶然、評論集の序文を執筆しただけではなく、とどまらない問題を提起する。

まず阿部知二の戦後について考える場合、広島で発行された教育雑誌『銀の鈴』（五・六年用）に、「冒険物語 暗黒に光を——ヴィングストンとスタンレー」というタイトルで、阿部知二によるヴィングストン評伝が連載された点をおさえておきたい。内容については後述するが、興味深いのは、すでに橋本幹子が指摘

しているように、この評伝が一九三六年に執筆されたものの再録であるという点だ。新潮社から少国民文庫の一冊として刊行された『スポーツと冒険物語』のなかに収録されたこの評伝が、一九四七年の広島における教育雑誌に再録された事実は、戦前と戦後を単純には区切ることができない、あらたな枠組みで考察する必要性を浮かび上がらせる¹⁰⁾。

また、『原子力と文学』に収録された序文に、実は、同じ時期に書かれた別バージヨンの文章があることにも注目する必要がある。戦後一〇年の節目として特集「戦後十年の文学」を組んだ雑誌『文学』一九五五年八月号の巻頭論文は、阿部知二による評論「原爆と文学」である。『原子力と文学』の序文とこの評論の内容はかなりの点で類似していて、序文がショート・バージョン、評論がロング・バージョンに相当する。というのも、文章の長短もさることながら、序文の末尾に示されている一九五五年七月という日付は、『原子力と文学』刊行の八月より早く、岩波書店の『文学』八月号とほとんど変わらない時期の執筆だと推測されるからである。では、戦後一〇年の節目に、古典文学などの論文を押さえて、「原爆と文学」がなぜ巻頭に収録されたのか。そして、序文との関係はいかなるものなのかという関心も沸く。

このような事実を前にすれば、原爆、広島、そして文学をめぐる阿部知二の軌跡をあらためてたどる意義が多少とも確認できるのではないだろうか。『原子力と文学』の序文を手がかりに阿部知二と原爆との結びつきについて考えるとき、リヴィングストン評伝の執筆された戦前と敗戦直後における「少国民」教育、そして、戦後一〇年を経て議論されていた「国民文学」の議論とが奇

妙に出会うことになる。より具体的には、それぞれの時代において唱えられた人道主義、博愛主義と阿部知二が独自に展開していた主知主義、人間の理解とが交錯するのである。では幅広い意味を含有する「ヒューマニズム」の概念が一九三〇年代から一九五〇年代の日本においてどのように議論されていたのか。また、こうした問題が、阿部知二のなかでどのように内面化されていたのか。本稿では、原爆との関係、また、そこから見えてくる「人間」と文学との関係に注目して阿部知二の執筆した伝記、評論、さらには同じ時期の翻訳や創作について考察する。阿部知二の戦後における活動の評価は、急激な「左傾化」をともなうという意味で非常に難しいともいわれているが¹¹⁾、一九四七年から一九五五年という時期における種々の活動を検討することによって、その難しさの原因がどこにあるのか再考する一助にもなると考える。以上の問題を前提として、戦後一〇年における原爆をめぐる文学と、阿部知二の執筆・創作活動が交差した地点を検証してみたい。

二 阿部知二と雑誌『銀の鈴』

阿部知二が「冒険物語 暗黒に光をーリヴィングストンとスタンレー」を連載した『銀の鈴』は、広島において戦後いち早く発刊され、すぐさま全国的に読者を獲得していった教育雑誌である。戦後の広島における文芸活動全般については、近年、広島市文化協会文芸部会編『占領期の出版メディアと検閲 戦後広島市の文芸活動』（勉誠出版、二〇一三年）が出版され、その詳細が明ら

かになつてゐる。また同著において、三浦精子が『銀の鈴』をはじめとする教育雑誌、児童文学の出版経緯について解説しているので（七一―一〇五頁）、評伝の内容について検討する前に、同氏の文章を元に『銀の鈴』の概要を記しておく。

一九四六年六月、広島市内の小学校教師が六〇名ほどで広島児童文化振興会を結成し、広島市千代田国民学校長の伊達高道が主導して、文芸、科学、美術、音楽、演劇、編集などの部門によるクラブ活動のような組織ができあがり、市内で日曜ごとに高学年を対象とした教室が開催されたという。この組織のうち、「編集部」が機関誌発行を企画して、公募したタイトルを採用して低学年用の『ぎんのすず』と高学年用の『銀の鈴』が発行されるに至る。創刊号はタブロイド版二頁での活版印刷で、発行は一九四六年八月六日、発売が八月一日になつてゐる。第二号からは広島印刷株式会社が印刷を担当し、一八頁総彩色刷りとなり、小学一・二年用『ギンノスズ』、三・四年用『ぎんのすず』、五・六年用『銀の鈴』に分かれていき、一九四八年からは各学年別に発行された。

また、第二号の編集・発行は広島児童文化振興会、印刷発行は広島印刷株式会社となつてゐるが、翌一九四七年六月号以降は、広島印刷出版部が改名、独立してできた広島図書株式会社が発行元となる。この広島図書は戦後の広島において独自の教育・児童向け出版を展開した会社として知られてゐる。広島図書についても、三浦氏の記述に依拠してさらに続けるが、同社はもとと一九四三年九月に同一企業統廃合令により広島市内二十四の印刷会社が統合されてできた陸軍指定工場の印刷会社である。経営者の

松井富一は一九四五年八月六日、工場に出勤途中に被爆し、工場にも大きな被害があつたが、一九四六年には子供向けの音楽雑誌『歌の新聞』を発刊し、『銀の鈴』も手がけるようになった。その後、手広く出版事業を展開するようになるのだが、広島印刷時代から英国軍事指定工場となつていて、配給制だった用紙も優先して保有できた点や、通訳として入社した力ナダ日系二世の坂出姉弟によつて、米国の児童出版物の日本語翻訳や、日本の漫画、童話の英語訳を海外向けに発信することが可能だった点などがその要因として挙げられている。

では、こうした経緯で発行されていた広島教育雑誌と阿部知二との接点はどこにあるのか。この点について、先にも触れた橋本幹子の論文は、阿部知二の五歳上の兄公平（二五歳で他界）が、広島高等師範出身（物理化学科）であつたことや、知二の東京大学時代の恩師エドモンド・ブランドンが戦後まもなく広島を訪問した後、一九四八年には広島、呉で講演もしてゐて、翌四九年の第三回平和祭には「ヒロシマ」という詩を提供し、寿岳文章の訳、山田耕筈の作曲で混声合唱されるなど、大いなる親日家であつたことを指摘している。たしかに、雑誌『銀の鈴』には当初から広島文理科大学教授であつた稲富栄次郎が関わつてゐたとの証言がある^④、同大学の長田新が編集顧問として名を連ねてゐるので、人脈がどこかで繋がっている可能性は否定できない。だが、現時点ではその手がかりまではつかむことができないので、本稿では、まず雑誌の編集方針を評伝の掲載経緯を通して検討することから始めてみたい。

雑誌『銀の鈴』に阿部のリヴィングストーン伝が連載されたのは、

一九四七年のことであり、六月号(第二巻第五号)、七月号(第二巻第六号)、九月号(第二巻第七号)、一〇月号(第二巻第八号)、一月月号(第二巻九号)、一二月月号(第二巻第一〇号)の全六回だった。雑誌『銀の鈴』が高学年用から五・六年用になるは前年の四六年一〇月、そして、各学年別になるのが翌一九四八年からなので、連載はちょうど五・六年用で発刊されていた時期に当たる。また、一九四七年六月からちょうど発行者が広島図書株式会社となり、表紙にも「教育雑誌」と銘打たれた時期から連載が始まったといえる。

五・六年用に発行された『銀の鈴』において、一九四七年の秋から一九四八年の間に、内容面で大きな変化があったといえ、まず広島図書が発行し始めた一九四七年六月号から頁数が倍増し四〇頁近くになった点を挙げるができるだろう。そのなかで分量が増えていったのが読み物であり、「楽しい読物」欄が、「勉強室」欄と分かれて目次にも登場するようになっていた。「暗黒に光を」の連載が始まった一九四七年六月号には、「楽しい読物」欄に、「月の出る山(氏原大作、中島秋峯画)」「秋学物語 庭ノミノムシ(九州帝国大学助教授 農学博士 安松京三)」、連載漫画 発明家銀ちゃん(平井房人)、「僕等の科学研究 ほたる(理学博士 岸谷真次郎)」、「石垣のある家(宮原無花樹作、橋本千代画)」が掲載されているが、一番前に置かれていたのが「暗黒に光を」であった。

引き続き、七月号では、「愉快な読物」欄のなかに「ジエームス・ワット(理学博士 田崎秀夫)」、「月の出る山(2)」、「暗黒に光を(2)」、「発明家銀ちゃん(2)」が収録され、九月号では、

「楽しい読物」で「野口英世(1)(医学博士 金久卓也)」「知事さんと牛(氏原大作)」、一〇月号でも野口英世の評伝(2)と、「暗黒に光を(4)」が掲載され、一月月号では「楽しい読物」欄に、「福沢諭吉(細田民樹)」、「暗黒に光を(5)」、「海を渡る馬(氏原大作)」、「ゴースムの賢人(畑耕一)」、一二月号の「楽しい読物」欄に、「ソクラテス(文学博士 稲富栄次郎)」、「ヘラクレスの忍耐(禾田水穂)」、「暗黒に光を(6)」、「指紋(海野十三)」が掲載されている。(なお、漫画「発明家銀ちゃん」、「アルプス銀ちゃん」の連載も継続しているといえるが、「愉快な漫画欄」へ移行している。)

こうしてみれば、ワット、野口英世、福沢諭吉、ソクラテスの評伝や、他の読みものに比べても、「暗黒に光を」の連載回数が圧倒的に多いことが分かる。掲載する分量については、この評伝が書下ろしではなく、『スポーツと冒険物語』に収録された評伝であって、前もって計算することは可能だった。したがって、「暗黒に光を」に関しては他に比べて別格の扱いだったことが明らかである。では、広島図書が発行元になってからの『銀の鈴』を編集するに当たって、阿部知二の執筆した評伝の魅力はどこにあったのだろうか。節をあらためて考えてみたい。

三 救済者の論理

雑誌『銀の鈴』に連載されたリヴィングストンの評伝「暗黒に光を」が再録だったことについてはすでに橋本氏の指摘を紹介した。その論で指摘されていることは主に以下の四点であり、(一)『スポーツと冒険物語』からの再録に当たって仮名違い、ふりが

なの変更があったこと、(二)「土人」「蠻人」といった語の書き換えがあったこと、(三)阿部知二文学において、バイロンとリヴィングストンとの対比がみられること、(四)「暗黒に光を」が戦後の中学校用教科書への採録された事実があること、である。

では仮に橋本氏のいうように作家と雑誌との個人的なつながりがあったとして、なぜ「暗黒に光を」という評伝が『銀の鈴』において長期の連載として再録されることになったのか。この疑問について検討するために、本節では、収録元の『スポーツと冒険物語』の内容をあらためて見ておくことにしたい。

『スポーツと冒険物語』を収録した日本少国民文庫は、一九三五年から一九三七年にかけて新潮社から発行されたシリーズである。第一弾として、一九三五年一月に山本有三『心に太陽を持って』(二二巻)が刊行されたのに引き続き、広瀬基『発明物語と科学手工』(九巻)、山本有三選『世界名作選(一)』と毎月のように出た後、一九三七年八月の山本有三、吉野源三郎著『君たちはどう生きるか』(五巻)まで全一六巻に至る。『心に太陽を持って』から始まって『君たちはどう生きるか』で終わり、日本人だけでなく、『世界名作選』『世界の謎』など、世界の教養にも触れようとするというタイトルだけでも見ても、未来を担う日本の少年少女に人間愛を説き、世界の平和と共存、そして将来の夢を与えようとする人道主義に満ちた著作集であることが推測される。

そのなかにあつて、『スポーツと冒険物語』は一九三六年八月に第一三巻として刊行された。編集は飛田徳洲と豊島与志雄が担当している。この文庫と阿部との接点は、明治大学文芸科講師になつたことが契機だと考えられる。阿部は一九三三年に日本大学

から明治大学に籍を移し、山本有三をはじめ、長与善郎、里見淳、豊島与志雄、岸田国士、萩原朔太郎、横光利一、小林秀雄、舟橋聖一、今日出海らとともに文芸科の講師となつている。少国民文庫が山本有三の肝いりでであり、『スポーツと冒険物語』の編集に豊島も加わり、別の『世界名作選』の巻においても阿部が執筆者となつていることから個人的なかわりを見て取れる。

『スポーツと冒険物語』の巻は、定期的にベルリンオリンピック開催に合わせたもので、第一部はオリンピックの歴史を綴つている「オリムピック物語」と、「スポーツ精神」「スポーツ案内」から成る。ただし、巻のタイトルにもあるように、全編がスポーツに関する話題になつているわけではなく、第二部は冒険物語となつているため、一冊の書物としてはバランスが悪いようにも見える。この前半と後半との整合性について、後半の「冒険物語」編集に当たつた豊島は以下のように述べている。

年若い皆さんは、身体にも精神にも、力強い元気がみちあふれてゐます。そして、すべて生きてゐるものゝ不思議さでもいひませうか、みちあふれてる元気はしゞゆう何かに使はれたがつてゐます。そしてまた、使はれることによつて更に新たな元気がわいてくるものです。けれども、それは健全な方法によらなければなりません(中略)。身体の方のことは、スポーツが受持ち、精神の方のことは、この冒険物語が受持つてをります。(二頁)

豊島の序文にあるように、「スポーツ」と「冒険」の「物語」

は、こどもたちの「元氣」を「健全」に行使するために、「身体」と「精神」の両面を配慮して構成されたものである。それゆえに、とくに「冒険物語」については、刺激的な内容に富んだ単に「面白い慰み」であるのではなく、「りつばな元氣をどういふふうに使つたら世の中のためになるか、元氣をどういふふうに使つたら大きな元氣がわいてくるか」を知らせるために書かれているという。

その結果、この本に収録された「冒険物語」のほとんどは「地理的冒険」に関わるもので、「文化のために尽くした」人々の話がメインである。より具体的に見れば、「沙漠の勇者」（上林暁、アラビアのロレンスに関する内容）、「信念の船隊」（中野好夫、マゼランに関する内容）、「泳げない近藤重蔵」（豊島与志雄）、「食はれる儀式」（高橋健二、ナハティガルと食人種）、「孤島の飛行機」（吉田甲子太郎、ウィルキンスの北極海横断）、「暗黒に光を」（阿部知二）、「地理的発見の歴史」（三島一）で構成されている。

これらのうち、最後の「地理的発見の歴史」は概説に当たるものなので、物語としては六編の収録になる。また、六編には分量の面でそれほど差がない。したがって、雑誌『銀の鈴』で収録される候補としては、この六編に限った場合、すべてに候補になる可能性があったといえる。

もちろんリヴィングストン評伝を再録したいという編集側の方針によって、既存のリヴィングストン評伝リストが作られて、その中から阿部のもが選ばれたという順番であったならば、この巻にこだわる理由はそれほどない。しかし、「スポーツ」と「冒険物語」の二部構成は、雑誌『銀の鈴』における「勉強室」と「楽

しい読物」との扱いにも通じる性質があると思われる。『スポーツと冒険物語』は教育・啓蒙的な趣旨の内容と、娯楽性を加味した読み物という構成であり、娯楽性のなかでも節度を持った内容をすでに吟味している。したがって、再録するに当たって基本的な方針が確認できている有利な素材である。加えて、山川惣治の紙芝居によって『少年王者』ブームに火がつき、アフリカの冒険ものが広く読まれていた時期にあつて、リヴィングストン評伝は格好の素材であつた⁶⁾。しかも『スポーツと冒険物語』に収録された高橋のアフリカものに比べれば、食人種として扱うといった部分が少なく、検閲の対象となるであろう人種差別の要素が少ない⁶⁾。したがって残りは「暗黒に光を」一編となる。

それだけでなく、「暗黒大陸」に関する記述から始まつて、幾多の危機を克服しながら、現地住民への愛を失わずに、最終的には奴隷解放の土台を築いた「アフリカの父」をめぐるキリスト教伝道者の評伝は、GHQ占領下における日本の境遇に対する教訓としてもふさわしい内容だつた。この点に関しては、黄益九が『少年王者』に関して「キリスト教の「福音」という問題を書き込むことで、野蛮・未開の征服といった植民地主義的な教化の論理と直接関わることをみごとに避ける狙い」（二〇三頁）と指摘しているが、山根龍一は石川淳の短編小説「焼跡のイエス」（『新潮』一九四六年一〇月）に関する分析を通して、当時の文学者が対峙した、キリスト教によって日本を変えてゆく「救済者」としてのGHQの論理を指摘して大変示唆的である⁶⁾。

雑誌『銀の鈴』が発行を維持継続するために、当時の子供たちの読書欲求と占領下の政治的状況を的確に把握し、「暗黒に光を」

が選ばれたとするならば、そこに時局に迎合的な要素を指摘することもできるだろう。ただし、創刊号では、「あたらしくよみがへつた日本」において、「みなさんと共に美しい心で「ぎんのすず」をうちふり、その美しいねを日本ぢゆう、せくわいぢゆうにひびきわたらせませう」（『ぎんのすず』一頁）、また、「清い美しい正しい力で新しい日本の文化をおこし明かるい平和な国にぞだて」（『銀の鈴』一頁）ようと謳い、記事のなかでも、あえて「呪ふべき原子爆弾」という記述を残し、その結果、検閲によって「呪ふべき」を墨で塗りつぶされるような姿勢を見せた編集陣がただ単に当局の方針に従っただけなのだろうか。むしろ、『スポーツと冒険物語』の巻末に収録されている「地理的発見の歴史」における「暗黒大陸」の以下の記述は、「暗黒に光を」が掲載された別の意図をほのめかしているようにも読める。

かうしてアフリカのだいたい地図が出来上がったが、その探検に尽くしたヨーロッパの国々は、この大陸の大部分を分割してそれぞれ植民地とした。そして境界を定め、富源を開発するために、測量や学術的調査も進み今では暗黒ではなくなつたが、黒人は果してこれが本当の光明と思つてゐるだらうか。
(三二三頁)

この記述は一九三六年におけるものであり、当時の西欧諸国によるアフリカ諸国への植民地政策を批判するなかで生じた反植民地主義的帝国主義の萌芽といえる主張である。しかし同じ主張がGHQ占領下の広島においてなされるとき、暗黒の日本に光をも

たらずアメリカという構図の安全性の下に、「本当の光明と思つてゐるだらうか」と問いかける、反占領政策への密かな思惑が込められているとも考えられる。真実を明らかにするという手立てはないのだが、『スポーツと冒険物語』から『銀の鈴』に至る再録の経緯にはさまざまな思いが絡んでいた可能性は、あらためて問い直されるべきであろう。

四 「自我」と「人道主義」——「十九世紀人」の象徴

「暗黒に光を」の再録に当たり、編集上の思惑について前節で検討してみたのだが、当の作者である阿部知二が主体的にどれほど関わつたかどうかは定かではない。とはいえ、阿部の立場を間接的に知る手がかりはある。戦後になつて阿部はいくつかの著作を再出版したり、戦前における著作をまとめたおして単行本化したりしている。そのなかに記されている記述から、同時期の自身の出版物に対する考え方が明らかになってくる。

たとえば、一九四七年四月に河出書房から刊行された評論集『文学論』は、すでに一九三九年に刊行されたものの再版であり、ふたたび出版される際、阿部は以下のような文章を載せている。

再出版に當つて

戦争のあひだこの本の増刷は休止してゐたが、数ヶ月まへに、出版元から、新しく出してみるつもりだといふ通知を受けたので、久しぶりに読みなほしてみた。七年の間に特に私の文学についての考に変化があるとも思へなかつた

〔中略〕。わづか数ヶ所に手を入れ、終の二頁を書改めることとで諦めるほかなかつた。

(五一六頁)

ここから分かるのは、戦争をはさんで阿部の文学観が大きく変わつてはいないという点である。それゆえに、再版を請われた際に、数箇所の修正によつて許可を与えることが可能だつた。書き加えたい内容はあるものの、基本的な前提が変更されたわけではなく、時間的にも執筆する余裕がないため、ほぼ同じ内容で出版することを許可したという。

同様のことは他の著作でもいえる。一九四八年一月に創元社から出版された評伝『バイロン』の場合は、リヴィングストンへの言及があるため、さらに興味深い事例となる。バイロンに関する評伝は、一九四〇年三月から『文学界』に連載が開始され、三章までを掲載して中断された。再開されたのは戦後であり、あとがきが書かれたのは四七年一月のことである。あとがきにおいて、阿部はリヴィングストンについて以下のように述べている。

書きおはる数日前に、私がふと芥川龍之介の本をひらいてみると、「大導師信輔の半生」といふ作品の中で、バイロンに出くはした。高等学校の時に、信輔は、クリスチャンの君子人である友人に、「バイロンも亦リヴィングストン伝を読み、泣いてやまなかつた……」などでたらめを話した。すると友人はそれをきいて大さう感動した、といふのだ。

いふまでもなく、リヴィングストンは、バイロンが死んだ時には数へ年にして十三だつたのだから、これはたしかに

でたらめである。信輔すなはち芥川にからかはれた友人は、悪魔道と人道の対立をバイロンとリヴィングストンに見てゐたのであらうが、とにかくういふ人物の取合せが、芥川の若かつた時代に、人々の頭の中に浮かんたりした、といふことを知りながら、私は七年前に書いたこの本の序章の中に、リヴィングストンを持ち出してゐることを思ひ出した。

(二四七頁)

「大導師信輔の半生」におけるエピソードそのものは実際の記述に基づいている。以下に引用するように、リヴィングストンとバイロンを同時に想起するという阿部の文学観は、すでに序章の元となる文章を執筆していた一九四〇年の時点、さらにはその前まで遡つて確認することができる。あえてバイロンの評伝を終えるにあつて芥川のエピソードを經由してリヴィングストンに触れるのは、あらためて自身の参照枠の正当性を担保しようとするためだと考えられる。そこで参照されているのは、序章で示される「自我」の人バイロンと、「人道主義」の人リヴィングストンとの、対極的でありながらも共通する「十九世紀人」の特徴である。

希臘はじめバルカン諸国の独立と解放とは、ヨーロッパ十九世紀史上の一大事件であつた。バイロンが死によつてそれを購つたこと、それは、アフリカの奥地の死によつて、ふしぎにも見事に、やはりヨーロッパ十九世紀史上の一大事件であつたところの奴隷解放を購つたリヴィングストン

を、我々に想起させないだらうか。自我の偏執に終始した魔性の蕩児のバイロンと、清廉無垢な犠牲的精神によつて動いた人道主義のリヴィングストンといふ、人間の両極ともいふべき二つの取合はせは、たしかに突飛にすぎると見えよう。しかし、その両極端から動き出して行つた二人が、ともにその痛ましい死によつて、歴史上の大行動を遂げ、ともに人間の進歩の階段を築き上げたことは、紛れもない事実であり、じつは、ここにこそ、「十九世紀人」を考へる鍵があると思はれる。

(二二—三頁)

阿部は、バイロンとリヴィングストンを「自我」と「人道主義」の対極に位置づけ、対照的でありながらも、「痛ましい死によつて」「人間の進歩の階段を築き上げた」点で共通する二人に「十九世紀人」の特徴を見ている。このような見方が芥川の時代からあつたという点があとがきで示され、『文学論』と同様に、彼の文学観が一貫している例として、あらためてバイロン、そしてリヴィングストンが挙げられているのである。したがって、まさにこのあとがきが執筆された時期に『銀の鈴』に連載されていた「暗黒に光を」は、阿部にとつてバイロン伝と両極をなす存在として位置づけられていたと推測できる。

このようにしてみれば、阿部が「自我」の人と「人道主義」の人を対置することで人間性を理解していたことは明らかになってくるが、バイロンの評伝とリヴィングストンの評伝は、それぞれ異なる経緯で出版されたものであつて、そこまでの理由を推し量る読者が多くいたかといえ、実際には想定が困難である。これ

は『スポーツと冒険物語』が刊行された翌年に、阿部知二によるバイロン伝が刊行されたのと同様（英米文学評伝叢書四三『バイロン』研究社、一九三七年一月）の経緯だといえるだろう。

しかしながら、阿部にとつてはリヴィングストンの生き方が、バイロンと併置されるべきものであり、「自我」に率直に生きる人とともに存在する「人道主義」という考え方に阿部知二の文学観、人間観があるといつてよい。この考えが創作で活かされる。戦後、阿部は南方での徴用体験や上海での戦争末期における教員生活を小説化している。それらの集大成といわれているのが「二つの死」（『中央公論』一九五三年四月）という小説である。ここでジャワでの徴用体験を題材にして、インドネシアの独立運動に参加してゆく「加世」と、現地でハンセン病治療に当たる医師の「五味」を登場させ、それぞれを「自我」と「人道主義」の人として描き、二人の死を通して、主人公の徴用体験を振り返らせる。まさに、バイロンとリヴィングストンの併置を創作において実践しているのである。阿部知二の評伝や評論、創作を見ていくとき、一九三〇年代半ばから一九五〇年代にいたるまで、バイロンとリヴィングストンとの併置によつて思考する方法に変化はない。『銀の鈴』に関しても、阿部自身の立場からすれば、バイロンの評伝を同時期に執筆するなかで、「十九世紀人」の両極を提供していたのだと考えられる。

五 戦後一〇年のヒューマニズム

阿部がバイロンとリヴィングストンに対して見せた「自我」と

「人道主義」という対極的な人物評価は、戦後における創作においても貫かれ、「二つの死」という小説でも同様の視点から人物設定がなされていたことは前節で述べた。このような見方を、実は、阿部の原爆と文学との関係に対する評論でも確認することができる。その際、キーワードになるのは「ヒューマニズム」である。

本稿の冒頭でも取り上げた評論「原爆と文学」において、阿部は「ヒューマニズムの怒りや悲みや望みによつては、この巨大な問題と取りくみ得ない」（七六九頁）と述べている。

その理由について以下の二つの議論が展開される。一点目として、「単なる『平和』の愛というものには、原爆的な恐怖とたたかう力がない」（七七〇―七七二頁）ことを挙げ、「戦争準備に狂奔しつつある国の指導者たちも、みずからを「平和愛好者」であると空念仏をとなえることは可能であり、事実いくらでもそれをいうのである」といった例をその根拠に挙げている。そのうえで、「原水爆は、単なる生命愛の声、人道の涙、または祈り、というものでは亡びないばかりでなく、時とすると、それらを食いものにしながら、さらに肥大してゆくことをすらすら」（七七〇頁）と主張している。

また、「第二に、そのような平和思想は、その観念性によつて、無責任なニヒリズムにまで下降してゆき、平和をのぞむ善意は、いつのまにかその裏はらのもの、つまり人間への絶望、人間への悪意にまで変質することになるおそれをもつ」（七七〇頁）とする。なぜなら、「結局は人間とは邪悪なものであり、人間の社会に善を求めるとはむだであり、または戦争というものを絶滅させるな

どということば夢想でしかない、というようなものになって行つたとして、ふしぎではない」（七七〇―七七二頁）からである。

ここで展開される二つの視点は、前節で見てきた「人道主義」と「自我」の関係に相当する。つまり、ここでの「ヒューマニズム」は、「人道主義」を包含する広い枠組みをもち、「自我」が肥大化しニヒリズムに陥ることをも見据えて設定されている。阿部は「ヒューマニズム」の両極に「人類愛」と「自己愛」を据えて、それらの破綻する地点を指摘する。そのため、たんに「人道主義」な視点で人類の平和を唱えることに違和感を覚えるのである。

なぜそこまで阿部は「ヒューマニズム」にこだわったのか。同じ『文学』の、一九五四年一月号に田辺耕一郎の評論「原爆の文学」が収録されている。これに対する批判ではないかというのが本稿の立場である。田辺の評論の末尾は以下のように締め括られる。

原爆・水爆の被害者にのこしつつある問題は、人道的にまた社会的に掘りさげてゆかなくてはならないのであつて、そのような認識方法に立つてゆけば、絶望や虚無感に辿りつくのとは反対にヒューマニズムの問題が出てくるのである。すなわち、プロテストや復讐心がそこから沸いてくるのではなく、このような大きな罪悪が繰返されてはならないというヒューマニズムの願いが、原・水爆禁止の叫びともなり、世界平和のための一切の戦争の排除ともなつてゆくのである。

（九三頁）

阿部が「ヒューマニズムの怒りや悲みや望みによつては、この巨大な問題と取りくみ得ない」と主張したのは、この田辺の「ヒューマニズムの願いが、原・水爆禁止の叫びともなり、世界平和のためは一切の戦争の排除ともなつてゆく」という樂觀的な見方に対する批判のためであつた。もちろん田辺の評論においても、引用の前半部分で「人道的にまた社会学的に掘りさげてゆかなくてはならない」と、阿部の「ヒューマニズム」に対する分析的視点と類似する部分もあるのだが、全体としては、田辺の結論に納得できない点があり、タイトルも田辺の論を想起させるような評論を同じ雑誌に発表したのではないだろうか。

そもそも阿部の「ヒューマニズム」には苦い経験があつた。一九三六年、二二六事件を契機に盛り上がりを見せたヒューマニズムの論争において、阿部知二は一定の役割を果たした。しかし、その後、国家、民族を声高に唱える論調にかき消されていった³⁾。その後の徴用作家としての戦争体験をふまえるならば、阿部が「原爆と文学」で引き合いに出した以下の例も、具体的な人物の顔を思い浮かべてのことだと思われる。

政治家、資本家、官僚、それにつきしたがう宗教者、学者、教育者、ジャーナリスト、芸術家たちなどにかぎつて、口やかましく、愛について説き、世界の人間の心の中が平和にならなければ戦争はおわらぬといい、道義をいい、労働者が上にさかつたりすることは平和の精神にもとるといい、心やさしい市民であれといい、従順であれと教え、なごす。

(七七〇頁)

戦後一〇年のこの時期、阿部の周囲では「国民文学」論争が盛んに行われていた。そのなかにあつて、ふたたび阿部は国家や民族の名の下に「ヒューマニズム」が躓きを見せる様を確認していた。それゆえに、「人道主義」のみで展開される議論にも疑問を抱かざるを得なかつたのであろう。こうして展開された評論「原爆と文学」に比べれば、『原子力と文学』の序文において持論を展開する割合は小さくなつてゐる。これはもちろん評論ではなく序文としての位置づけも考慮されているだろうし、評論のなかには花田清輝のようにある種類似した論考も収録されている。加えて、評論において暗に批判したと思われる田辺の文章を想起する文脈にはない。しかし、論調としては共通しているし、彼のヒューマニズム論が垣間見える箇所がある。

歴史が破滅に進むか平和と幸福とに進むかという問題がこの原水爆―原子力ということに、いわば集約された形としてわれわれの前に差し出されているのである。そして文学がその問題にとり組む以上は、感情的に嘆き、憤り、絶望するだけで終るべきであらうか。もちろんそれにはそれとしての意義が―それがたとえば芸術的な結晶になつてゐる場合は―あるといわなければならず、そのことをわれわれは忘れるものではない。しかもこの問題は、この現代という危機の中において対面するかぎり、単なるヒューマニズムの嘆きや怒りに終始してはられない。

(三頁)

阿部にとつての「ヒューマニズム」は「人間性」全体を指し、これまで見てきたような「自我」と「人道主義」の両極を揺れ動く「感情」と、「感情」の揺れを「探求」しようとする「知性」との関係を説いた「主知主義」に立脚する。一九三〇年に刊行された阿部の評論集『主知主義文学論』（厚生閣書店）において、

主知は単なる社会、功利的にのみ使役せられない。又、それはエモオシオンを排しない。文学内に於けるエモオシオンの存在を信じ且つその拡張をも希望する。何となれば、それは、エモオシオンを克服する「方法」を將に把握せんとしてゐるから、従来、無限性と神秘性とをその資性と考へられたところのエモオシオンの深淵を、「主知的方法」によつて探求することが、真の主知的文学ではなからうか。

（四〇頁）

と述べている。また、別の箇所では、「人間性」に「ヒューマニズム」とのルビを振り、「安全なのは、人間性—人間の感情を方法として文学を取り扱うふみちである」（二四頁）とも言っている。阿部は文学活動の初期からこのような「ヒューマニズム」を主張しているのである。あらためて時期の問題について考えてみるならば、一九五五年が第二次世界大戦から一〇年後であるのに対して、阿部の主知主義が展開され始めたのも、第一次世界大戦終結からおよそ一〇年後のことである。ハーバート・リードの議論を基盤に出来る阿部の主知主義が、リードの第一次世界大戦への従軍体験を踏まえた議論だったとすれば、その後、自らも

南方へ徴用され、ふたたび戦争から一〇年という時期を迎えて、「主知主義」を前提とした「ヒューマニズム」の議論を提示したことは想像に難くない。

こうして、従来、あまり顧みられることのなかつた阿部知二による『原子力と文学』収録の序文と、彼の広島、そして原爆文学との接点に関する考察を行つてみた。阿部知二の執筆活動という側面からすれば、広島で発行された教育雑誌『銀の鈴』に掲載された「暗黒に光を」の連載を通して、彼が英米文学に関わるうえで想定していた対極的な人物評価をあらためて認識することができたし、戦後においても戦前と変わらず、その構図を維持して執筆を進めようとした経緯が見えてきた。また、原爆文学の歴史からすれば、創作においては原爆に関わる作品を残すことがなかつた阿部知二に焦点を当てることは困難であると思いつつも、彼が示したヒューマニズムの問題は、第一次世界大戦後だけでなく、第二次世界大戦後も繰り返され、さらには現代にまで至つているともいえるなかで、もう一度考えてみる意味があるといえないだろうか。

注

- 1 橋本幹子『銀の鈴』と阿部知二——冒険物語「暗黒に光を——」リヴィングストンとスタンレー」の先行作品他」（『阿部知二研究』一四号、二〇〇七年五月）
- 2 水上勲『阿部知二研究』（双文社出版、一九九五年、三二五—三三二頁）
- 3 三浦精子「児童文学 「ぎんのすず」（広島図書）を中心に」（広

- 島市文化協会文芸部会編『占領期の出版メディアと検閲 戦後広島
の文芸活動』勉誠出版、二〇一三年、八二頁）
- 4 黄益九『交錯する戦争の記憶 占領空間の物語』春風社、二〇〇
八年、一八五―一八七頁）
- 5 同前、一九七―一九八頁を参照。
- 6 山根龍一「石川淳「焼跡のイエス」論——被占領下における「倫
理」の可能性をめぐる——」（『総合文化研究』一八卷一号、二〇
一二年八月）
- 7 水上、前掲書（注2）収録の「ヒューマンイズム論の終焉」（二六六―
二九一頁）を参照。